

入試直前特訓ゼミ 第10回

γクラス
国語

問題をよく読み、できる問題から取り組むこと。
答えはすべて解答用紙に記入すること。

2026年 2月8日(日) 実施

受験 松井塾

國學院高等学校(一般第一回)

【国語】(五〇分) (満点:一〇〇点)

注意 字数制限がある問題の解答については、句読点・記号も一字とする。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学の「真理」とされるものは、科学哲学者カール・ポパーの言うように、つねに「(1) 反証可能性」にさらされなければならぬ。そういう意味で決して絶対ではなく、さしあたりまだ反証されていない仮説であるにすぎない。科学のこうした謙虚で「X」な態度は、しかし非専門家からは理解されにくい。そうであるのは、科学の手続き(たとえば学会発表や権威ある専門誌への掲載)が、科学者集団には原則的に公平なルールとして共有されるものであっても、①非専門家にとっては、自分たちを排除する高い壁のように思われるからである。

市民の常識の方が科学の(2)寡頭政(エリート主義)に対して民主的だから、政治においては優先されるべきだ、という考え方もありうる。A 市民の立場を絶対化し、(3)熟議から科学を開放するならば、ただちに別の問題が生じてくるだろう。科学知のかわりに「Y」ゆえに恐怖の感情が支配したり、また疑似科学やオカルト、さらには陰謀説や粗雑な終末論といったありとあらゆる「怪しい」知識が市民の常識のなかに浸透したりするならば、それは非常に困った事態を招きかねない(実際のところ、街の書店の「がん」に関する書棚の半分は、たいていこうした怪しい知識にもとづく書物によって占められている)。こうした愚かしい選択によって、小さなリスクを避けようとして、より大きなリスクを招く、といったことが考えられる。

このように専門知と市民の両方の側に問題が含まれている。科学的知識は、今日の政治の諸問題を考えるうえで不可欠であり尊重され、これは文科系においても必要となるだろう。

そのうえで、③市民として有すべき、専門知とは性格の異なる実践知が要請されるだろう。C それは、一方では正義や公平について考えられる諸原理に関する知識、他方で実際の具体的なケースにおいて、原理がどのように適用できるか、その限界はどこにあるのかを見極める判断力、そして専門家や当事者および一般市民など相異なる立場からの相異なる意見に耳を傾け、場合によっては妥協点を探り、原理と実際のあいだを行き来しながら(ロールズが「反省的均衡」と呼ぶプロセスが参考になる)決定へと向かう努力、こうした実践と知との結合が現代の実践知と呼ばれるにふさわしいものであろう。このようにして専門家と市民の不幸な対立的図式を崩していくことが必要である。「公共哲学」的な知がもし可能であるなら、それには専門知と市民のあいだを媒介する役割が期待される。

しかし、このようなことが本当に可能なのだろうか。これは専門家、大学やその他の学校の教員、当事者、政治家、市民運動家等々に、実際にはありえないような能力と努力を要請するものではないのか。誰が、いかなる動機から、自らの利益や感情を抑制してこのような知的活動に喜んで参加するのだろうか。民主主義に必要な知識に関して、楽観的な展望を持つことは困難である。しかし、現代のように非常に複雑化した社会で、民主主義をまじめに考えるならば、④こうした努力を欠くわけにはいかない。それが欠ける場所では、民主主義は専門家のエリート支配に移行してその実質を失うか、あるいは愚者の(7)ポピュリズムの天下になってますます信用を失うかすることになるだろう。そのような困難な分岐点にわれわれは立っているともいえる。

- (注) (1) 反証可能性: 科学の理論は、実験や観察の結果によって、批判あるいは否定され得ること。 (森 政稔『迷走する民主主義』による) (2) 寡頭政: 少数者が国家権力をにぎって行う独裁的な政治。寡頭政

れるべきなのだが、科学によって導かれる結論が、そのまま民主主義的合意となるわけではない。科学と政治(民主主義)とは、異なるルールに属する実践であり、民主主義が配慮すべき事柄は科学的な正しさに尽きるわけではないからである。しかし、では、②科学の知と区別された市民の知とは何であるべきかを積極的に語ろうとすると、さまざまな困難に直面する。

政治的な思慮を厳密な学問知から区別しようとした最も古い先例としては、(4)アリストテレスによる「実践知(フロンesis)」を挙げることができる。アリストテレスによれば、政治のように自然必然性が支配するのではない「他でもありうる」行為の領域では、あまり厳密な知識を求めず、かえって好ましくない。そしてフロンesisは机上の知識ではなく、政治的实践とともに身に付くような経験知であるとされていた。「公共哲学」の立場のなかには、こうしたアリストテレスの実践知を継承しようとするものもある。

このような考え方には魅力があると私も思うが、しかしアリストテレスの時代とは異なり、今日では日常生活に科学技術が深く浸透し、政治の多くの(5)イシューが科学技術と関連しているために、われわれは科学的な知識抜きに政治的な判断ができなくなっている。自然科学的知識以外にも、経済や法律の専門知が政治の判断に求められることも数多い。B、「常識」に近い市民の実践知だけでは政治的判断は困難であり、専門家の学問知が導入されることは避けがたい。専門知に尽きない何らかの知が必要であるという意味では、アリストテレスの言う実践知は貴重なものだが、そのままでは現代に必要な市民の知識を満たすには不十分である。

市民もまた科学や経済、法律などに関する基礎知識を有することが、この複雑な社会で政治判断を誤らないために、いっそう必要とされてきている。そのためには、高校までの基礎教育や大学での教養科目などが、この目的のために役立っているかどうかを検証してみることがあるだろう。また時代とともに変化していく科学の専門知を一般市民向けに解説する(6)インタプリターの役割が重要とな

治。

- (3) 熟議:十分に議論すること。 (4) アリストテレス:古代ギリシアの哲学者。 (5) イシュー:論点。争点。 (6) インタプリター:通訳。通訳者。 (7) ポピュリズム:大衆迎合主義。

問一 空欄[A]、[C]に補うのに最もふさわしい語を、次の選択肢の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ そのため ウ むしろ

エ そのうえ オ しかし

問二 空欄[X]、[Y]に補うのに最もふさわしい語を、下の選択肢の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

X ア 絶対的 イ 民主的 ウ 排他的

エ 相対的 オ 独善的

Y ア 大言壮語 イ 有名無実 ウ 疑心暗鬼

エ 試行錯誤 オ 自暴自棄

問三 傍線部①「非専門家にとっては、自分たちを排除する高い壁のように思われる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 市民たちは、専門的な知識に触れる機会を十分に与えられていないと感じているということ。

イ 市民たちは、科学者集団の共有しているルールがもたらす恩恵を受けられないということ。

ウ 一般の市民には、厳密な知識を求める科学の手続きが近づきがたいものと思われるということ。

エ 政治家にとって、科学的な知識の厳密さは政治的な判断を誤らせる原因になるということ。

オ 政治家には、政治的な思慮と専門的な知識の厳密さを分けて考える必要があるということ。

問四 傍線部②「科学の知と区別された市民の知とは何であるべきかを積極的に語ろうとすると、さまざまな困難に直面する」とあるが、それはなぜか。その理由として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常生活に科学技術が浸透したせいで、市民たちは実践知による政治的判断をする必要がなくなってしまったから。

イ 科学技術が身近に普及した現代社会では、多くの政治的課題が専門家の知識抜きでは解決できないものになったから。

ウ 政治的な判断をするためには、厳密な学問知よりも政治的実践知とともに身に付くような経験知が必要だから。

エ アリストテレスの時代とは異なり、市民はより専門的で厳密な知識を身に付けたいと考えるようになったから。

オ 専門家だけでなく市民もまた、高校までの基礎教育や大学での教養科目を通じて専門知を身に付ける必要があるから。

問五 傍線部③「市民として有すべき、専門知とは性格の異なる実践知」とあるが、その説明としてふさわしくないものを、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 立場や考え方の異なった人たちの意見に耳を傾け、妥協点を探る。

イ 原理が実際のケースにどのように適用できるかを見極め、判断する。

ウ 科学の専門知と市民の常識をなかだちすることで、両者の対立を崩す。

エ 専門知と実践のバランスをとりながら、現実的な決定を行う努力をする。

オ 日常生活に浸透した科学の専門知識によって、政治的な決断を行う。

問六 傍線部④「こうした努力」とはどのような「努力」か。本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問七 本文の内容に合致するものを、次の選択肢の中から一つ選び、

る二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォームの柱、置き忘れたような(4)運水車、それから車内の誰かに祝儀の札を云っている(5)赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は漸くほととした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い睨をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひつつめの(6)銀杏返しに結って、横なでの痕のある鞆だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、(7)三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。(8)講和問題、新婦新郎、(9)瀆職事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ(10)殆どXに眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいらなかった。この隧道の中の汽車と、こ

記号で答えなさい。

ア 現代の「公共哲学」的な知は、アリストテレスの実践知を継承することができない。

イ 政治判断に必要な専門知について考えることが、現代の民主主義には求められている。

ウ 政治においては、民主的な市民の常識の方が科学の知識よりも優先されるべきである。

エ 街の書店にあふれている誤った知識に基づく書物は、全て取り除かなければならない。

オ 現代の民主主義は、愚者のポピュリズムの天下になって大きく信用を失ってしまった。

カ 現代の専門家や教育機関にとって、今日の市民に必要な知識を満たすのは簡単ではない。

問八 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

或曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り(1)二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらは(2)その時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は(3)外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元氣さえ起らなかった。が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛きを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさり始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先に(4)けたたましい(3)日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵る声と共に、私の乗っている

の田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋まっている夕刊と、これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶって、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頬に窓を開けようとして、重い硝子戸は中々思うようにはあがらないらしい。あの鞆だらけの頬は、愈々赤くなって、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかった。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点の行く事であった。にも関わらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしてしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を掻げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような

問九 Yで眺めて

いた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光の中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこか

ら土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸(おそ)きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁(わら)屋根(ね)や瓦屋根(ね)がごみごみと狭(せま)苦(く)しく建てこんで、踏切り番(ばん)が振るのであろう、唯(ただ)一(ひと)旗(はた)のうす白い旗(はた)が懶(もろ)げに(11)暮(よ)色(いろ)を揺(ゆ)っていた。やつと隧道を出(で)たと思(おも)う——その時(とき)その(12)蕭(せう)索(さく)とした踏切(たつき)りの柵(さく)の向(む)うに、私は頬(ほ)の赤(あか)い三人(さんにん)の男(おとこ)の子(こ)が、目(め)白(しろ)押し(おし)に並(なら)んで立(た)っているのを見た。彼(かれ)等(ら)は皆(みな)、この曇(曇)天(てん)に押(お)しすくめられたかと思(おも)う程(ほど)、揃(そろ)って背(せ)が低(ひか)かった。そうして又(また)この町(まち)はずれの陰(かげ)惨(せつ)たる風物(ふうぶつ)と同(おな)じような色(いろ)の着(き)物を着(き)ていた。それが汽(き)車(くるま)の通(と)るのを仰(お)ぎ見(み)ながら、一(ひと)斉(せい)に手(て)を挙(あ)げるが早(はや)いか、(13)い(い)たいけ(け)な喉(のど)を高く反(か)らせて、何(なに)とも意(い)味(み)の分(わ)らない(14)喊(わ)声(こゑ)を一生(いっせい)懸(けん)命(めい)に迸(はな)らせた。するとその瞬(しゅん)間(かん)である。窓(まど)から半(はん)身(み)を乗(の)り出(で)して例(れい)の娘(むすめ)が、あ(あ)の霜(しも)焼(や)けの手(て)をつと(15)のぼして、勢(いきほ)よく左(ひだり)右(みぎ)に振(ふ)ったと思(おも)うと、忽(たち)ち心(こゝろ)を躍(たぎ)らすばかり暖(あたた)かな日(ひ)の色(いろ)に染(し)まっ(て)いる蜜(みつ)柑(かん)が凡(およ)そ五(ご)つ六(ろ)つ、汽(き)車(くるま)を見(み)送(おく)った子(こ)供(ども)たちの上(うへ)へばらばらと空(から)から降(ふ)って来(き)た。私(わたし)は思(おも)わず息(いき)を呑(の)んだ。そうして剎(し)那(な)に一切(いっけい)を了(り)解(かい)した。小(こ)娘(むすめ)は、恐(おそ)らくはこれ(これ)から奉(ほう)公(こう)先(せん)へ赴(おもむ)こうとしてい(い)る小(こ)娘(むすめ)は、その懐(なご)に藏(かく)して(16)幾(いく)類(るい)の蜜(みつ)柑(かん)を窓(まど)から投(な)げ、わ(わ)ざわ(わ)ざ踏(ふ)切(き)りま(ま)で見(み)送(おく)りに来(き)た弟(あに)たち(ち)の勞(らう)に報(むか)したの(の)である。暮(よ)色(いろ)を帯(お)びた町(まち)はずれ(れ)の踏(ふ)切(き)りと、小(こ)鳥(とり)のよう(よう)に声(こゑ)を挙(あ)げた三(さん)人(にん)の子(こ)供(ども)たちと、そう(そう)して上(うへ)に乱(ご)落(らく)する鮮(あざ)な蜜(みつ)柑(かん)の色(いろ)と——すべ(す)ては汽(き)車(くるま)の窓(まど)の外(ほか)に、瞬(また)く暇(ひま)もな(な)く通(と)り過(か)した。が、私(わたし)の心(こゝろ)の上(うへ)に、切(き)らない程(ほど)はつきりと、この光(ひかり)景(けい)が焼(や)きつ(つ)けられた。そう(そう)してそ(そ)こから、或(ある)得(とく)体(たい)の知(し)れな(な)い朗(は)らかな心(こゝろ)もち(もち)が湧(わ)き上(あ)って来(き)るの(の)を意(い)識(し)した。私(わたし)は昂(たか)然(ぜん)と頭(あたま)を挙(あ)げて、ま(ま)るで別(わか)れ人(ひと)を見(み)るよう(よう)に(17)あ(あ)の小(こ)娘(むすめ)を注(ちゅう)視(し)した。小(こ)娘(むすめ)は時(とき)か(か)も(も)う私(わたし)の前(まへ)の席(せき)に返(かえ)って、不(ふ)相(さう)変(へん)軼(てつ)だらけ(け)の頬(ほ)を萌(も)黄(わう)色(いろ)の毛(け)糸(いと)の襟(えり)巻(まき)に埋(う)めながら、大(おほ)きな風(かぜ)呂(ろ)敷(敷)包(か)みを抱(かか)え

⑧ 卑俗な

- ア みじめで卑しい イ 不真面目で品がない
ウ 大げさで嘘っぽい エ 不潔でみすばらしい
オ ありふれてくだらない

問二 空欄[X・Y]に補うのに最もふさわしい語を、下の選択肢の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- X ア 受動的 イ 客観的 ウ 機械的
エ 包括的 オ 主体的
- Y ア 卑屈な イ 厳格な ウ 不可解な
エ 冷酷な オ 高慢な

問三 傍線部①「その時の私の心もち」とあるが、どのような「心もち」か。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 尋常でない怒りを抑えきれず、興奮している。
イ 悲しみに打ちひしがれ、気持ちが沈んでいる。
ウ 活気がなく、やる方(かた)のないけだるさを感じている。
エ 疲労を感じつつも、気持ちはくつろいでいる。
オ 電車が出発することを、名残惜しく思っている。

問四 傍線部②「あの小娘を注視した」とあるが、このときの「私」の様子として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア この娘の賢明な行動に心を打たれ、うかつに彼女を見下してしまった自分を恥じている。
イ 田舎に取り残されたこの娘の弟たちの今後の生活を思い、心配な気持ちで見つめている。
ウ 家族への深い愛情に共感し、自分も家族を思い出して懐かしみつつ、この娘を見守っている。
エ それまでこの娘に抱いていた嫌悪感は取り去られ、すがすがしい気持ちで彼女を見つめている。
オ 突如起こった出来事に驚き、状況を飲み込めないまま、ただ

た手に、しっかりと二等切符を握っている。……

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又

Z を僅に忘れる事が出来たのである。

(注) (1) 二等客車：当時は一等車、二等車、三等車があった。
(2) 外套：防寒などのために衣服の上に着る、ゆったりした外衣。コート。

(芥川龍之介「蜜柑」による)

- (3) 日和下駄：晴れた日に履く齒の低い下駄。
(4) 運水車：水を撒くための手押し車。
(5) 赤帽：駅構内で旅客の手荷物を運ぶ仕事で、赤い帽子をかぶっていた人。
(6) 銀杏返し：日本髪(わづか)の一種。未婚女性の髪形で、大正時代、中流以上は結わなかった。
(7) 三等の赤切符：当時は等級によって切符が色別されていた。
(8) 講和問題：第一次世界大戦の講和問題。
(9) 瀆職事件：汚職事件。
(10) 一旗：ひとつの旗。ひとながれ。
(11) 暮色：夕暮れの景色。
(12) 蕭索とした：ものさびしい様子。
(13) いたいけな：いじらしくて痛々しい様子。
(14) 喊声：ときの声。ここでは、三人の男の子が一斉にあげた叫び声。
(15) 幾類：幾つか。類は果物を数える単位。
問一 二重傍線部①「けたたましい」、②「卑俗な」の本文中での意味として最もふさわしいものを、後の選択肢の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
- ① けたたましい
ア 不愉快な イ 慌ただしげな
ウ ぶつそうな エ 神経質な
オ 大ざっぱな

ただ呆然とこの娘を見ている。

問五 本文中の「蜜柑」の効果や役割の説明としてふさわしいものを、次の選択肢の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 作品中の描写に表れた様々な色彩の中でもひととき鮮やかな印象を与え、清涼な読後感をもたらしている。
イ 甘酸っぱい空気が匂やかに車中に広がる様子を想像させ、「私」が娘に抱く切ない想いを表している。
ウ 咽喉を病んでいる「私」の体調が、今後回復していくことを暗示するものとして描かれている。
エ 作品中における、「私」の感情の好転を象徴する意味合いを持つものとして読み取ることができる。
オ ささいな出来事にも心を動かされる「私」の感受性の豊かさを表すものとして描かれている。
カ さわやかな印象を与えることで、「私」の疲労感がぬぐい難いものであることを対照的に示している。
キ 高価とはいえない蜜柑のようなものにさえ執着してしまう、この姉と弟たちの貧しさを表している。
- 問六 空欄[Z]に補うのにふさわしい語句を、本文中より十四字で抜き出して答えなさい。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したためて出づるに、^① たそかれ

の道たどたどし。ここに⁽¹⁾等萩と云ふ古き⁽²⁾隠士有り。いづれの年

にや、江戸に來りて子を尋ぬ。遙か十とせ余りなり。いかに老いさ

らばひて有るにや、はた死にけるにやと、人に尋ね侍れば、「^②い

まだ存命して、そこそこ」と、をしゆ。市中ひそかに引き入りて、

③ あやしの小家に夕顔・へちまのはえかかりて、⁽³⁾鶏頭・ははき木

に戸ばそをかくす。「さては此のうちにこそ」と門を叩けば、侘し

げなる女の出で、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじ

は、このあたり何某と云ふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給

へ」と云ふ。かれが妻なるべしとらる。むかし物がたりにこそか

かる風情は侍れと、やがて^④尋ねあひて、その家に二夜とまりて、

⑤ 名月はつるがの湊にと旅立つ。等萩も共に送らんと、裾をかして

からけて、道の枝折とつかれ立つ。

〔注〕 (1) 等萩：人名。 (2) 隠士：俗世から逃れてひっそり暮らす人。 (3) 鶏頭：ははき木。「鶏頭」も「ははき木」も植物の名前。 (4) 尋ねあひて、その家に二夜とまりて、

問一 傍線部①「たそかれの道たどたどし」とあるが、それはどの

オ 賑やかな街の中にひっそりとたたずんだ、いかにも隠士の家

問四 傍線部④「尋ねあひ」は現代仮名遣いでは「尋ねあい」とな

問五 傍線部⑤「名月」とは一般的に八月十五夜を指すが、その八

エ 葉月 オ 文月

問六 『奥の細道』の作者を、次の選択肢の中から選び、記号で答

- ア 与謝蕪村 イ 小林一茶 ウ 松尾芭蕉
エ 正岡子規 オ 石川啄木

④ 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答え、カタカナを漢字

(1) 大臣の職を解いて更迭する。

(2) 川の氾濫を止める。

(3) 作のコウセツは問わない。

(4) 責任を二十う。

(5) 無味カンソウだ。

(6) 偉業を成し上げ。

(7) 手続きがワズラわしい。

(8) 今年はコトに寒い。

肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真つ暗な夜道を徒歩で進むのは、山賊に襲われる危険がある

イ 福井までのあこがれの街道を歩くことができず浮き足立って

ウ 薄気味悪い道のりを進むのが、そら恐ろしく、腰が引けてし

エ 薄暗くなった中、足元が確かでなく、なかなか先に進めない

オ もうすぐ真夜中になってしまふので友人の家まで先を急いで

問二 傍線部②「いまだ存命して、そこそこ」とあるが、この後に

補うのに最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号

ア (そこそこ)で見かけた。

イ (そこそこ)知っている。

ウ (そこそこ)元気である。

エ (そこそこ)に住んでいる。

オ (そこそこ)に出かけた。

問三 傍線部③「あやしの小家」に対する筆者の感想はどのような

ア 市中では全く目にしないような植物が植えられた、一風変わ

イ 草花が生え放題のみすばらしい場所でありながらも、趣深い

ウ 四季折々のしやれた草花が隅々にまで丁寧に植えられている

エ うっそうと生い茂った植物に囲まれた日光の入らないような

薄暗い不気味なところ。

